

お客様 各位

## (社) 宝石鑑別団体協議会 (AGL) の 「カラーグレード検証作業の結果報告」を受けて

平素は格別のお引き立てを賜り、心より厚く御礼申し上げます。

この度の、弊社のダイヤモンド鑑定に関する一連の報道等により、お客様に多大なご迷惑とご心配をお掛けいたしておりますことは誠に申し訳なく、心より深くお詫び申し上げます。

さて、2010年6月21日、(社)宝石鑑別団体協議会(AGL)での「弊社が組織的にかさ上げ鑑定を行っていた」とされる件に関しましての、カラーグレード検証（再鑑定）作業の結果がAGLのホームページで発表されました。

AGL 会員検査機関の皆様には、日常の業務に加え、検証作業による多大なるご負担をお掛けしたことにお詫びとともに心よりお礼を申し上げます。

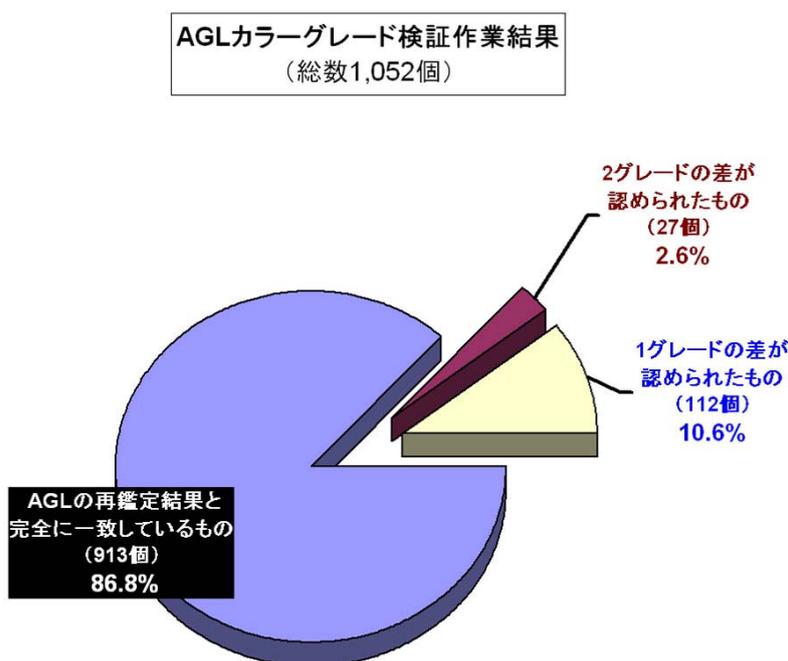
### (1) AGL の検証作業結果

今回の AGL の再鑑定結果は以下の通りでした（総検証数 1,052 個うち 1ct 以上 235 個）。

- 弊社鑑定結果と再鑑定の結果が完全に一致・・・86.8%（913 個）
- 弊社鑑定結果と再鑑定の結果のうち、1グレードの差異があったもの・・・10.6%（112 個）  
（うち 1ct 以上に限定すると 62 個）
- 弊社鑑定結果と再鑑定の結果のうち、2グレードの差異があったもの・・・2.6%（27 個）  
（うち 1ct 以上に限定すると 21 個）

つまり、86.8%はAGLの再鑑定の結果と一致しており、弊社の組織的且つ一律のかさ上げがなかったことが明らかとなりました。また、少なくとも 97.4%は、通常は問題がないと判断される 1 グレード以内の差に留まる結果でした。

注) 今回の AGL の報告では、1 グレードの差異について AGL 会員間では許容できないと記載されていますが、下記(3)の事由により、1 グレードの差異は許容範囲と考えられます。

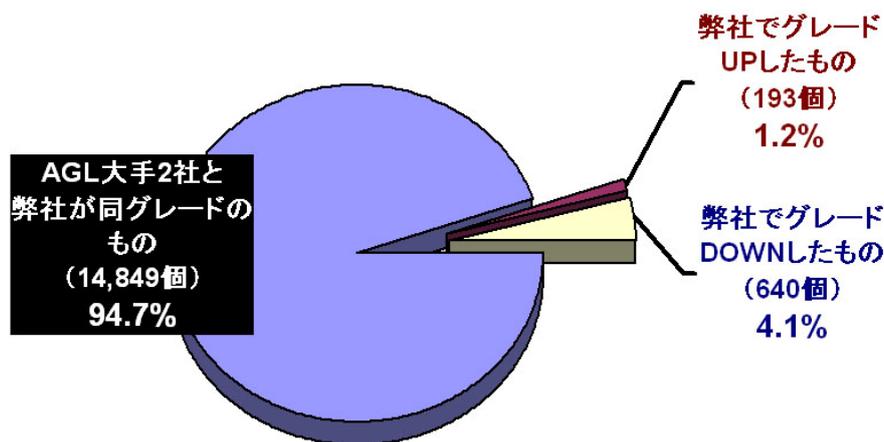


## (2) 全宝協における独自調査結果

一連の報道等で問題とされた2007年2月～2008年10月までの弊社のカラーグレードに関し、弊社でも独自に内部調査を致しておりました。弊社が内部資料を再調査した結果、弊社のダイヤモンド・グレーディングは、当時の宝石鑑別団体協議会（AGL）一会員機関として、概ね標準的な結果であったことを確認しております。なお、弊社は既に独自調査資料をAGLに提出しております。

当該期間における弊社とAGL加盟大手2社のカラーグレーディング結果を精査したところ、15,682個※中、14,849個が同グレード、640個について1グレード下方への差（例えば弊社がE、他社がD）、193個について弊社が1グレード上方への差（例えば弊社がD、他社がE）が見られました。すなわち、他社結果との整合比率は、94.7%が同グレードで、残りの5.3%に差異が認められました。しかし、そのうち4.1%は弊社の方が厳しく（下の等級に）評価しており、弊社が上方（上の等級）に評価していたのは全体の1.2%に過ぎませんでした。

**AGL大手2社と弊社のカラーグレード比較表**  
(総数15,682個/D～Kカラー)  
2007/02～2008/10(東京・大阪・福岡)



※15,682個中7,599個については、弊社の管理Noに対応するAGL大手会員機関の管理番号の控えがあります。

## (3) カラーグレーディングの際の影響要素

ダイヤモンドのカラーグレーディングは、検査時の環境（特に検査石と光源の距離・角度）の他に、①蛍光性、②メイク（カット）および形状、③色相、彩度や明度（灰色味や褐色味など）④クラリティ、⑤透明性（クラウド状内包物の存在）等により、大きく影響を受けます。すなわち、低い等級のダイヤモンドほどカラーの判定が困難になります。さらに、これらによる影響は、ダイヤモンドのサイズが大きくなる程無視できないものとなり、カラーの見え方に1～2グレードの差異を生じることがあります。ダイヤモンド・マスターストーン（カラー）原器運用管理委員会の裁定規約においては、これらは影響要素として考慮されることが規定されておりますが、このような影響を受けた場合の定量的なGIAグレード方式は現在未公開であり、AGLにも詳細な基準がないのが現状です。

検査対象となった期間（2007年2月～2008年10月）当時、AGLのダイヤモンド・グレーディング規約では、検査光源の種類や検査室の明るさなどの大まかなルールが規定されていたのみでした。その後、GIAが発行した機関紙Gems & Gemology Winter 2008年に「Color Grading“D-to-Z”Diamonds at the GIA Laboratory」が紹介され、この論文に記載された検査

環境や方法を基にAGLにおいても2010年1月に新たに光源および検査方法についての詳細が決められております。従いまして、当時と現在では検査の環境が異なっている可能性があります。特に光源との距離について、当時は規定がありませんでしたが、現在は8～10インチ(20～25 cm)と定められており、この違いによりマスター・ストーン(規定では0.3ct以上)と大きさや品質が異なる検査石の場合、大きな影響を受けます。具体的には、0.3ctのマスターストーンで1ct以上の低品質の石を検査する際、光源に接近して観察した場合よりも、20～25 cm離して検査した場合では明らかに1グレード～2グレードの相違が生じる要因の一つとなります。

また、官能検査であるカラーグレーディングは、特にボーダー付近の決定において、グレード技術者の心理的要因の影響が避けられません。一連の報道以降、AGL会員機関のカラーグレードにおいて、ボーダーあたりはグレードをdown(下方に評価)させる傾向が見受けられ、実際に当時検査した自社の結果をdown(下の等級に評価)させている実情があります。以上の通り、今回のAGLの検証作業の結果と弊社独自の内部調査の結果からは、若干の差異が見られましたが、これらは、上記事由における検査環境の相違やグレード技術者における心理的要因が影響しているものと考えられます。

AGL 会員機関ごとに1グレードの差異が生じる結果は、日常的にも多く見受けられ、AGL 会員機関であれば、裁定基準に照らして許容範囲とされています。従って、弊社のグレードは当時のAGL 会員機関として逸脱したものではなかったと結論付けられます。

さて、AGLによると、弊社は除名処分相当と判断され、AGLへの復帰を2年間認めないとのことでした。AGLの報告文中に“AGL規約に則れば除名は総会の3分の2以上の決議を経て・・・”とありますが、これは、第14条の罰則及び手順の適用ではなく、弊社の労働争議に端を発した今回の騒動において、結果的にAGLの会員機関としてダイヤモンドのカラーグレードに対する社会的信用を失墜させたための上記判断だったと考えます。

なお、AGLの報告の最後に“番号設定が複雑すぎて全国宝石学協会の発行場所を特定する事は不可能でした。”との記述がありますが、弊社では容易に検索可能である事を、事前にAGLには伝えておりました。

弊社は、日本における宝石検査機関の先駆けとして1965年に創立され、国内業界でいち早く科学鑑別の重要性を説き、社内に技術研究室を設置、最新鋭の分析装置を駆使した最先端の研究に取り組んでまいりました。これらの研究成果は、日々の鑑別・グレーディング業務に活かされ、同時に国内外学術会議での継続発表によって、国際的な認知と世界の主要ラボとの強固な協力関係が築かれております。現在は、GIAを含む世界の6大宝石検査機関で組織されるラボ・マニュアル調整委員会(LMHC)の一員として、世界の宝石ラボが発行するレポートの用語の統一や国際的ラボ間の高度な技術研究交流を行っております。

弊社は既にAGLを自主退会しておりますが、独立した宝石検査会社として再構築に取り組み、これまでの技術力に慢心することなく、より厳格な検査体制を整え、宝石業界ひいては社会に貢献できる企業を目指してまいりますので、今後ともご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年6月21日  
株式会社 全国宝石学協会  
代表取締役 高橋 夏樹